

二月・三月

さんげつき なかしまあつし 山月記 中島敦

隋西の李徴は博學才穎、天宝の末年、若くして名を虎榜官吏登用合格者の札に連ね、ついで江南尉尉、警察事務官に補せられたが、性、狷介、自ら恃むところ頗る厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかつた。いくばくもなく官を退いた後は、故山、號略に帰臥し、人と交わりを絶つて、ひたすら詩作に耽つた。下吏となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである。しかし、文名は容易に揚がらず、生活は日を逐うて苦しくなる。李徴は漸く焦躁に駆られて来た。この頃からその容貌も峭刻となり、肉落ち骨秀で、眼光のみ徒らに炯々として、曾て進士に登第した頃の豊類の美少年の俤は、何処に求めようもない。数年の後、貧窮に堪えず、妻子の衣食のために遂に節を屈して、再び東へ赴き、一地方官吏の職を奉ずることになった。一方、これは、己の詩業に半ば絶望したためでもある。曾ての同輩は既に遙か高位に進み、彼が昔、鈍物として齒牙にもかけなかつたその連中の下命を拝さねばならぬことが、往年の儁才李徴の自尊心を如何に傷つけたかは、想像に難くない。彼は怏々として樂しまず、狂悖(非常識)で人に逆らうばかりの性は愈々抑え難くなった。一年の後、公用で旅に出、汝水のほとりに宿つた時、遂に発狂した。或夜半、急に顔色を変えて寢床から起上ると、何か訳の分らぬことを叫びつつそのまま下にとび下りて、闇の中へ駈出した。彼は二度と戻つて来なかつた。附近の山野を搜索しても、何の手掛かりもない。その後李徴がどうなつたかを知る者は、誰もなかつた。(中略)

己は詩によつて名を成そうと思ひながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交わつて切磋琢磨に努めたりすることをしなかつた。かといつて、又、己は俗物の間に伍することも潔しとしなかつた。(中略)己は次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙慙とによつて益々己の内なる臆病な自尊心を飼いつとらせる結果になつた。人間は誰でも猛獸使用であり、その猛獸に当るのが、各人の性情だという。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獸だつた。虎だつたのだ。(後略)

中島敦(なかしまあつし)小説家。一九〇九(明治四十二)〜一九四二(昭和十七)。享年三十三歳。二十数編の小説があるが、生前発表されたのは三作品のみ。

「山月記」は昭和十六年に発表。一見、漢文の読み下し文のような文章から始まり、傲慢さゆえ虎となつた李徴を描いている。唐代の「人虎伝」より着想を得たものとされるが、中島の作品はあくまで人間の苦悩と絶望を中心とした、近代的な小説となつている。

中島敦は、祖父を初め、親族に多くの漢學者を輩出する環境に育つたため、若いころより漢文学に造詣が深く、そこから材料を取つた一連の作品が残つている。「李陵」「悟浄數異」「悟浄出世」「名人伝」「弟子」など。また、ぜんそくを患つていたため、南方での生活がそれによいとて、一時パラオ(西太平洋の国)に勤務した。その経験は、南方ものと呼ばれる一群の作品に結晶しています。

さらに、中島敦には、「狼疾記」「かめれおん日記」といった、人間のアイデンティティを問う、一連の作品がある。神経過敏で内向的な主人公が、自分の存在の根拠を問ひ、自らの存在そのものに不安を感じている。

同時代のカフカにも迫る文学世界を展開している。その視点から読み直すと、彼の作品は大変現代的で、深い文学的洞眼に支えられていることがわかる。その早逝が惜しまれる。

カフカ自身、中国の「莊子」に魅せられており、意外に共通する感覚があつたのかもしれない。